中部大学

中部大学民族資料博物館
CHUBU UNIVERSITY MUSEUM OF ETHNOLOGICAL ART

中部大学

2026 中部大学民族資料博物館
秋季企画展

発光生物とエスノバイオロジー

Luminous Organisms and Ethnobiology



中部大学民族資料博物館
CHUBU UNIVERSITY MUSEUM OF ETHNOLOGICAL ART

2026 中部大学民族資料博物館
秋季企画展

発光生物と
エスノバイオロジー

Luminous Organisms and Ethnobiology

2026年
10月30日［金］～12月25日［金］

主催／中部大学民族資料博物館
会場／中部大学民族資料博物館

ごあいさつ

「一筋の光明が差す」という文では「希望」の意味を示すように、「光」という語にはさまざまな意味に基づく用法があります。「力」を示す「威光」や仏像の背後に付けられる「光背」など、その例は枚挙に暇がありません。この度の企画展では、そんな「光」に生物学の分野からアプローチしている、応用生物学部の大場裕一教授が研究対象とする「発光生物」について、教授や当館が所蔵する資料を交えご紹介します。

ホタルなどに代表される「発光生物」の定義や具体的な生物の例については大場教授の解説に記されていますが、本展では、タイトルに「エスノバイオロジー」というちょっと耳慣れない語も加わっています。これは、簡潔に申し上げれば「人びとと周りの生物との関わりについて研究する」学問分野の名称です。ただ、ここで用いられる「エスノ」という語（一般に「民族」を示します）にも、実は「光」と同じくさまざまな意味があてられてきた歴史があります。

「エスノ」とは古代ギリシア語の「エトノス」を基に造られた語で、その「エトノス」には「デモス（都市国家ポリスに住む市民）」に対する「地方の人びとや部族」の意味も含まれていました。ただし紀元前後になると、ユダヤ人から見たギリシア人など、ユダヤ人以外の「異邦人」を指す語としても用いられるようになります。さらに、キリスト教世界では、やがてキリスト教徒ではない「異教徒」を指す意味も帯びるようになりました。一方、現代のギリシアでは「国民」や「民族」といった意味で広く使われる語となっています。

本展の後半には、大場教授がテレビ番組のロケに同行して調査を行ったパプアニューギニアの「ホタルの木」の話が登場しますが、このパプアニューギニアには800以上の言語が存在するとされ、日本の1.2倍の面積がある地で多くの人類学者が調査を行ったことで知られています。人類学の研究手法であるフィールドワークにおいて重要な要素をなす「参与観察」を始めたブロニスワフ・マリノフスキはトロブリアンド諸島に数年間滞在し、人間のジェンダー観が文化によって大きく異なることを示したマーガレット・ミードはセピック川流域の調査を実施しました。また本学国際関係学部創設時の主要メンバーだった畑中幸子名誉教授も中央高地や西部の人びとについて調査を重ねた関係で、本館には多くの資料が所蔵されているところです。

今回、生物学者である大場教授はその「ホタルの木」を調査する中で、現地の人びとの反応や考え方にふれ大きな衝撃を受け、人びとと生物の関わりだけでなく「光」に対する認識の違いについても想いを新たにしたようです。「人」と「生物」、そして「光」。本展ではその3つの要素が織りなすエスノバイオロジーの世界を大場教授の調査を通じて考察します。最後に大場教授を始め、本展の開催に多大なお力添えを頂きました関係各位に深く感謝と御礼を申し上げ、ご挨拶とさせて頂きます。

2026年（令和8）10月

中野 智章

中部大学民族資料博物館 館長

（国際関係学部長、教授）

研究者紹介

大場 裕一

活動歴

略歴 PROFILE



大場 裕一

（OBA, Yuichi）

1970年札幌生まれ。小学生から高校生まで西蔵王に近い山形県山形市内の自然豊かな場所で育つ。当時、近所の川にはホタルがいた。北海道大学理学部化学科卒。このとき発光生物の化学を専門とする故・中村英士助教授（当時）に出会う。博士後期課程では、愛知県岡崎市にある基礎生物学研究所で過ごす。博士（理学）。学位論文は魚類の内分泌学。2000年から名古屋大学大学院生命農学研究科にて中村英士教授率いる研究室の助手から助教（2000年中村教授逝去）。その後、中部大学応用生物学部准教授から教授へ。現在に至る。原著論文は100篇以上。中部大学応用生物学部環境生物科学科主任、中部大学蝶類研究資料館館長、中部大学創造的リベラルアーツセンター兼任、中部大学民族資料博物館副館長。

著書

◯西野嘉憲（写真）・大場裕一（解説）『光るキノコと夜の森』（岩波書店・2013年）

◯大場裕一『ホタルの光は、なぞだらけ』（くもん出版・2013年）
＊第60回青少年読書感想文全国コンクール課題図書（中学校の部）。

◯大場裕一（著）・宮武健仁（写真）『光る生きもの』シリーズ『海のいきもの』『陸のいきもの』『キノコ』（くもん出版・2015年）
＊『海のいきもの』は全国図書館協議会第48回「夏休みの本」選定。

◯大場裕一『光る生きものはなぜ光る?』（文一総合出版・2015年）

◯大場裕一（総監修）『光る生き物（学研の図鑑LITE）』（Gakken・2015年）

◯大場裕一『恐竜はホタルを見たか』（岩波科学ライブラリー・2016年）

◯サラ・ルイス（著）・大場裕一（監修）・高橋功一（翻訳）『ホタルの不思議な世界』（エクスナレッジ・2018年）

◯大場裕一『発光生物学への招待』（日本評論社・2020年）

◯大場裕一『世界の発光生物』（名古屋大学出版会・2022年）

◯今津奈鶴子（作）・大場裕一（監修）『ほたるのひかりかた（月刊かがくのとも）』（福音館書店・2022年）

◯大場裕一（編集）『発光生物のはなし』（朝倉書店・2024年）

◯大場裕一『ホタルのことばが知りたい』（くもん出版・2026年）

◯雑誌『図書』（岩波書店）に「光る生きもの夜話」連載中（2026年）

主な調査活動

1980年代	小学生のころ、山形県の近所の川でホタルをはじめて見た。おそらくゲンジボタル。昆虫少年であったが、当時はホタルにはそれほど関心を持たなかった。
1992年頃	中村英士助教授（当時）の手伝いで大槌湾（岩手県）でツノナシオキアミ（発光種）の漁船に乗船。初のフィールド調査だったが、激しい船酔いで役に立たず。
2004年	アメリカのホタル研究者の友人がホタルの浮世絵を所有していることを知り、関心を持つ。楊洲周延『別荘の蛍』を入手し、コレクション熱に火がついた。
2008年	アメリカ・イリノイ州でホタルを調査。ホタルを食べる珍しいフォツリス属のホタルを観察。
2009年	八丈島でニッポンヒラタキノコバエ（発光種）を再発見（南海タイムス2009年7月17日）。以来、八丈島には40回以上訪れている。
2010年	ニュージーランド北島で洞窟性のニュージーランドヒカリキノコバエとラチア（世界唯一の淡水性発光巻貝）を調査。
2011年	名古屋大学キャンパス内でホタルミミズ（発光種）を発見。愛知県初、東海地方では63年ぶりの報告（中日新聞2011年1月13日）。
2011年	愛知県日間賀島でイソミミズ（発光種）を発見。愛知県初記録（中日新聞2011年11月8日）。
2012年	東京都八丈島でホタルミミズを発見。八丈島初記録（東京七島新聞2012年2月18日）。
2013−2015年	中国・武漢で雌雄の発光色が異なるホタル「窮宇蛍」の調査
2014年	サクラエビ（発光種）の発光のカラー撮影に世界で初めて成功（中日新聞2014年11月30日）。
2015年	アメリカ・モントレー湾で、無人探査船を用いた深海発光生物の航海調査に参加。
2016年	ホタルミミズを地元山形県で発見。国内北限記録（朝日新聞山形県版・宮城県版2016年1月23日）。
2017年	台湾・台北で、ホタル、ヨコスジタマキビモドキ（海産の発光性巻貝）、ウミホタルを調査。
2017年	ロシア・クラスノヤルスクで、発光キノコを調査。モスクワ大学動物学博物館で江戸時代に採集された日本産ホタル科の標本を見る。
2018年	フィジーで、発光カタツムリを調査。
2018年	秋田県でホタルミミズを確認。北限記録を更新（秋田魁新報2018年12月24日）。
2019年	下村脩（2008年ノーベル化学賞）著『Bioluminescence』第3版の編集に参加。
2023年	タイで発光カタツムリ5種を発見。80年ぶりの新記録（中日新聞2023年10月6日）。
2023年	現代芸術家の赤松音呂氏とともに世界的なメディアアートの祭典アルス・エレクトロニカの人工知能&ライフアート部門で栄誉賞を受賞。
2026年	NHK「ダーウィンが来た!」のロケでパプアニューギニアの同時明滅するホタルを調査。日本の研究者としては3人目。

目　次

02 ——— ごあいさつ
中部大学民族資料博物館 館長　中野 智章

03 ——— 研究者紹介
中部大学応用生物学部 教授　大場 裕一

図版・解説

05 ——— Chapter Ⅰ　世界の発光生物
世界の発光生物とその調査
日本の発光生物とその調査
09 ——— Chapter Ⅱ　海の発光生物
13 ——— Chapter Ⅲ　陸の発光生物
コラム 1「浮世絵に描かれたホタルたち」
17 ——— Chapter Ⅳ　発光生物と持続可能な私たちの未来
コラム 2「パプアニューギニアと魂としてのホタル」

論考

20 ——— 大場 裕一「私たちは、もっと自然に学び、民族に学ばなくてはいけない」

資料編

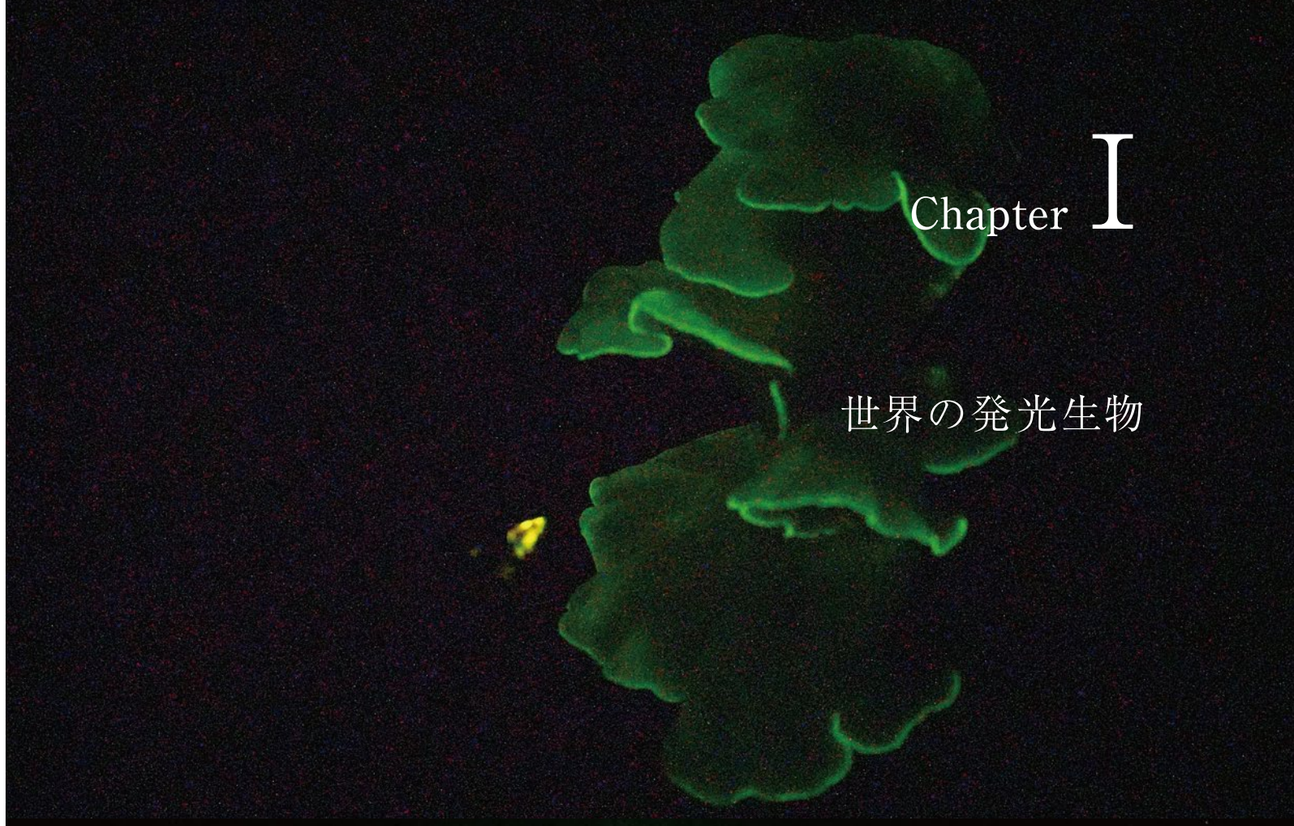
23 ——— 参考文献　　日本語で読める発光生物に関する本
24 ——— 2026年度 中部大学民族資料博物館
秋季企画展「発光生物とエスノバイオロジー」主要出品リスト

凡例

1. 本書は、2026年10月30日から12月25日にかけて中部大学民族資料博物館において開催する、2026秋季企画展「発光生物とエスノバイオロジー」の展覧会図録である。展覧会の主催は次のとおりである。
主催：中部大学民族資料博物館／学術企画：大場裕一（中部大学応用生物学部 教授）
2. 本展覧会の企画・校正及び図録の編集は、中部大学民族資料博物館（国際関係学部）の中野智章、同（応用生物学部）大場裕一、中村正男、原田千夏子が行った。
3. 各章の概要文、作品資料の解説およびコラムは大場裕一が作成した（[O] 表示）。
4. 本図録に掲載している図版の資料は、館蔵資料以外は全て大場裕一の所有であり、また撮影写真については撮影者に許可を得たものである。
5. 本図録に掲載している図版に付した番号は、出品資料の一部であり、出品リスト、および展覧会場の陳列順とは必ずしも一致しない。

＊本書で使用する「フォーク・アーツ」という言葉は、祭祀用品、装飾を伴った実用品など、民族的な固有文化から生まれた伝統芸術・工芸・意匠のことを指します。

＊本図録内の一部の資料について、詳細の確認がとれないものがありました。関連表記等についてお心当たりの方がおられましたらご連絡いただけましたら幸いです。



Chapter Ⅰ
世界の発光生物

世界中にはいろいろな発光生物がいる。

何が光っているのだろう? どうして光っているのだろう?

世界中のひとびとは、生物が光を生み出すその現象を、太古から驚きの目で見つめてきたにちがいない。そして、そこに伝承がはじまり文化の一部となった。一方、科学者はその光の謎にメスを入れ始めた。

この企画展では、「発光生物」というひとつの視点から、生き物と人との関わりについて考察を試みる。生物と人間の関係を多角的に解き明かす学問を「エスノバイオロジー」という。ゆえに、「発光生物とエスノバイオロジー」。

第1章ではまず、国内外のどのような場所に、どんな発光生物がいるのかを紹介する。それぞれの場所には、そこでしか見られない発光生物がいて、それぞれに個性を発揮している。

たとえば、洞窟の天井を光の星粒で埋め尽くすヒカリキノコバエの幼虫——この仲間は、ニュージーランドとオーストラリア東部とタスマニアにしかいない。ニュージーランド固有種である巻貝のなかまのラチアは、淡水中で一生を送る世界唯一の発光生物として有名だ。

ホタルといっても、場所が変われば姿かたちも異なる種がいる。基本的にホタルは成虫になると口器が退化して餌を食べることができないが、なぜか北米のフォツリス属のホタルだけは成虫になっても餌を食べる。しかも、食べるのはなんと他の種のホタルという奇妙さ。中国やパプアニューギニアには、オスとメスで発光する色が違うホタルが見つかっている。南米には、頭部が赤く光る甲虫の幼虫がいる。発光生物の中でも赤く光るものは極めて珍しく、それがまるで列車のヘッドライトのように見えることから現地では、レールロードワーム（鉄道虫）と呼ばれている。

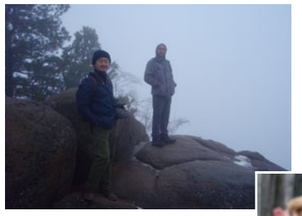
奇妙な発光生物がいるのは、なにも世界のどこかとは限らない。実は、日本は「発光生物の宝庫」として発光生物学者の間ではよく知られ、外国から見れば珍しい発光生物があふれている特別な場所なのだ。

ホタルイカやサクラエビは、日本では食材にされるほどポピュラーな発光生物だが、世界的には発見することさえ難しい。ウミホタルが簡単な仕掛けで採集できるのも日本の沿岸だけであり、そのため昔から、これらを研究したい世界の研究者は、はるばる日本を訪れるか、日本の研究者に採集の協力を仰ぐしかなかった。もともと日本人の多くが住んでいた里山中流域の川には、必ずゲンジボタルがいる（いた）。幼虫が川にいるからである。ところが、世界を見渡すと、幼虫が川の中に暮らしているホタルは、世界に2600種いると言われるホタル科の中でもわずか数種にすぎない。ホタルが川の上を飛んでいることが、世界的には非常に奇妙な光景なのである。

世界の発光生物とその調査

そこにしかいない発光生物を見つけるために、発光生物の調査は世界各地で行われる。酷暑の中、極寒の中、土を掘り、水に手を突っ込み、網を振りまわす。もちろん、調査は夜が中心となる。昼間に現地の人たちと交流することも、重要な調査の一環だ。その発光生物を人々がどう見ているのかを聞き取っておくのである。

ロシア（クラスノヤルスク）



タイガの森をひたすら歩く
（左：大場教授）



キノコを見つけたペテシュコフ博士

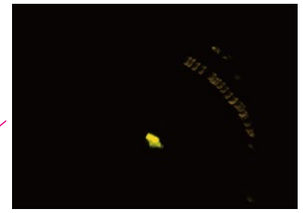
中国（武漢）



田舎の村。歴史が止まっているようだ

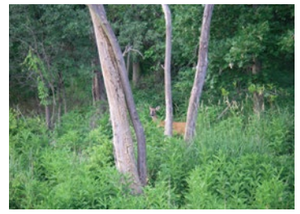


穹宇蛍のオス

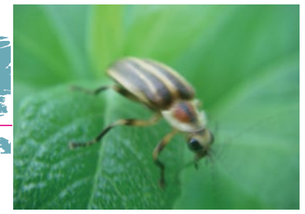


穹宇蛍の発光。右がオスで左がメス
雌雄で光の色が違うように見える

シカゴ（イリノイ州）



パロス森林保護区。シカがこっちをみていた



フォツリス属のホタル。すばしっこくて撮影が難しい

台湾（台北）



台湾に広くみられるホタル*Abscondita cerata*

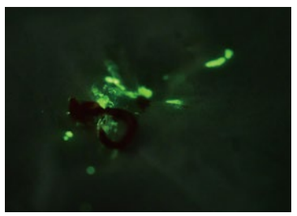


成虫は発光しないホタル*Drilaster olivieri*

タイ（チョンブリー）



チュラロンコン大学の研究者と発光ミズを調査



イソミミズが発光液を出しているようす

パプアニューギニア
（ニューアイルランド島カビエン近く）



ホタルの木。ホタルが群れて同時明滅する



葉の裏に休む2種のホタル

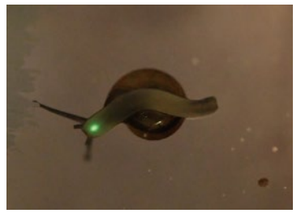


トメ村の人たちと（左：大場教授）

フィジー（フィジー本島ラウトカ近く）



発光カタツムリのトラップを準備中。
結局この方法では採れなかった



発光カタツムリ*Quantula striata*の発光

カリフォルニア（モントレー）



深海無人探査船のコントロールルーム



恐ろしい顔つきのミツマタヤリウオ

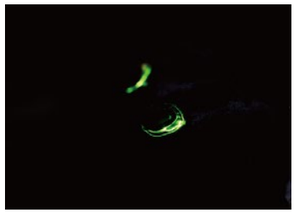
ニュージーランド（ワイトモ洞窟近く）



調査のようす



世界唯一の淡水性発光巻貝ラチア



ラチアの発光のようす

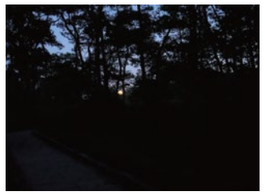
日本の発光生物とその調査

日本は発光生物の宝庫だ。南北に長く伸びた列島には亜寒帯から亜熱帯まで多様な気候があり、その湿潤な環境からは発光菌類が25種、ホタル類が51種も見つかっている。富山湾、相模湾、駿河湾は、陸接型深海地形と呼ばれ、深海へのアクセスが良く、プランクトンネットや漁師の網によって深海の発光生物が捕獲できる。実は、日本だけでも十分に発光生物の調査ができる、非常にありがたい環境に、私たちはいる。



北海道（釧路）





釧路湿原はヘイケボタルの分布最北限に近い

富山（魚津）



クロエリシリス（発光ゴカイ）とその採集のようす



神奈川（真鶴）

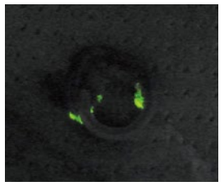




横浜国大の調査船で深海性の発光するコペポーダを採る

福岡（福津）





はじめてイソミミズを見つけたのがここの砂浜

沖縄（石垣島）





琉球列島には、本土とはちがうさまざまな種のホタルがいる

高知（以布利）







漁港のトロ箱から発光魚を分けてもらう。新鮮なのでまだ光っていた

東京（八丈島）







潮だまりでヨコスジタマキビモドキという発光する巻貝を探す



Chapter II

海の発光生物

私たちは、最も馴染みのある発光生物がホタルであるため、発光生物というとつい陸上の生き物を想像しがちだ。しかし実のところ、発光生物の大部分は海の中――特に深海域――に棲んでいる（Haddock et al., 2010）。深海とは、太陽光がほとんど届かず、青色の光だけが僅かに残るほぼ真っ暗で何もない領域のことである。定義上、水深200メートルよりも深いところはすべて「深海」と呼ぶことになっている。その常にほぼ真っ暗な領域こそが、発光生物たちの主たる世界なのだ。そこで本章（第2章）では、海の発光生物にフォーカスを当てる。

はるか昔から近代にいたるまで、人類にとって海は身近な存在であった。しかしその関わりは、岸辺の浅瀬で貝や海藻を採ったり、小舟を出して漁を行ったりする沿岸の表層だけに限られていた。そのため深海はまったくの未知であり、19世紀半ばまで人々は、深海は生き物がまったく棲んでいない「静かで真っ暗な死の世界」だと信じていたのである。

しかし、1870年代イギリスのチャレンジャー号が行った世界一周の海洋調査や、1886年のフランスのタリスマン号の深海調査によって、深海には腹側に無数の小さな発光器を並べた奇妙な魚類やイカなど、実に多くの発光生物が存在することが判明した（西村, 1992）。この驚くべき発見を契機に、深海魚が群れ泳ぐ想像図が博物画に数多く描かれるようになる。百科事典や科学啓蒙書に描かれたリトグラフの画面からは、深海という未知の世界を覗いてみたいという当時の人々の熱烈な好奇心が、今なお鮮明に伝わってくる。

さらに1930年代には、アメリカのウィリアム・ビービが「バチスフェア（潜水球）」と呼ばれる小窓のついた巨大な鉄球を製作。自らそれに乗り込んで深海の様子を直接見に行くという大冒険を成し遂げた。チャレンジャー号以来人々が想像を膨らませていたとおり、さまざまな発光生物が光を放ちながら深海を泳ぎまわる光景を、ビービは自らの目で確かめたのである（ビービ, 1970）。

ただし、こうした一見華々しい海洋科学の進歩の裏側には、世界の海を支配しそれを国益のために利用しようとする欧米諸国の植民地政策や、経済利益を追求する帝国主義があった点を見落としてはならない。

ここではまず、深海に生息する奇妙な発光生物の標本をいくつかご覧いただこう。続いて、海洋調査の歴史を今に伝える文献資料や当時の博物画を紹介する。

参考文献
ウィリアム・ビービ（1970）『深海探検記〈珍奇な魚と生物〉』現代教養文庫
西村三郎（1992）『チャレンジャー号探検 近代海洋学の幕開け』中公新書
Haddock, S. H. D., Moline, M. A., Case, J. F. (2010) Bioluminescence in the sea. *Annu. Rev. Mar. Sci.* 2, 443-493.

01 Specimen



《標本/ ギンハダカ》
瓶高25 cm/採集地：高知県御畳瀬（個人蔵）

発光器が腹側にずらりと並んでいることから、その発光の役割はカウンターイルミネーションだと考えられる。発光器の表面は、新鮮な個体では鮮やかなルビー色をしている。ルビー色の色素がカラーフィルターの役割を担い、発光の色を海面から届く太陽光の色にできるだけ近づけていると予想される。発光細胞から放出される光は青色で、これがルビー色のフィルターを通過すると青色にすこしだけ緑色が入る。

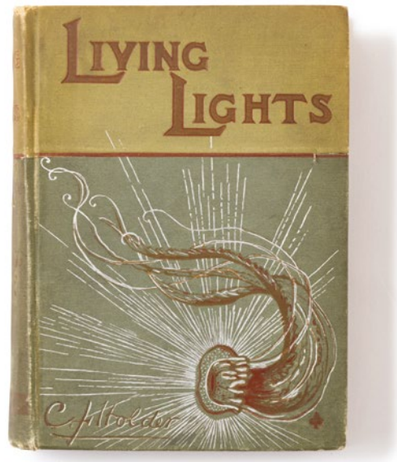


02 Fieldwork Flashlight

《ウミホタル用トラップと発光生物調査に使う懐中電灯》
高20.5 cm/高16.5 cm（個人蔵）

ウミホタルはトラップ（わな）で簡単に集められるため、古くから研究材料として使われてきた。瓶のふたにはウミホタルが入るように穴が開けてある。ウミホタルは肉食なので、瓶の中には豚レバーや魚のアラやカニカマを入れたら、ひもをつかんで海に沈める。場所が良ければ1瓶で100匹近くも採ることができる。

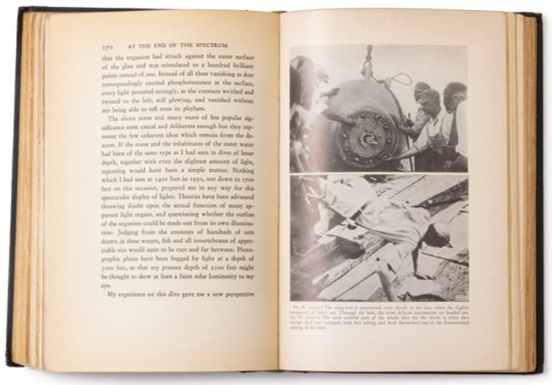
懐中電灯は一見ふつうのモノに見えるが、実は発光生物の調査をする上で都合のよい特別なもの。特徴は白色光が弱いということと、赤色光が出せること。弱い白色光は発光生物を撮影する時つけたり消したりするのに眩しくなくてよい。赤色光は暗順応を妨げない。この懐中電灯、もともとは天体観測用である。あまりに点けたり消したりしすぎたせいで、とうとうスイッチ部分が壊れてしまった。



03 Book

《書籍/ C. F. Holder, Living Lights, Charles Scribner's Sons, NY.(1887年)》
15×20 cm（個人蔵）

チャールズ・ホールダー（1851-1915）は、カリフォルニア出身のサイエンスライターにして、スポーツフィッシングに関する著作のパイオニア。本書は、発光生物について一般向けに紹介した最初期のものとして科学史的に重要である。この本が出る少し前の1870年代にイギリスのチャレンジャー号が深海調査を行い、深海にはたくさんの発光生物がいることがちょうどわかったところだったことも、このタイミングで本書が出版された理由であったと思われる。

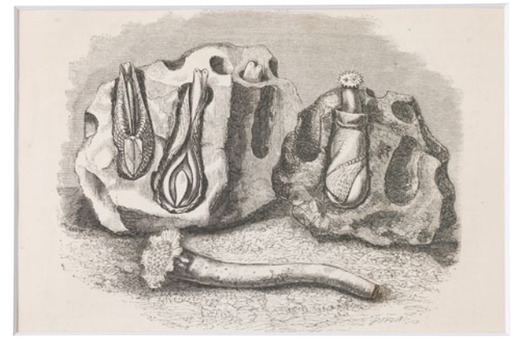


04 Book

《書籍/ W. Beebe, Half Mile Down, Harcourt, Brace and Co., NY.（1934年）》
16.5×24 cm（個人蔵）

著者ウィリアム・ビービ（1877-1962）は、冒険家、サイエンスライター。バチスフェア（潜水球）と名付けた直径145センチ、壁の厚さ2.5センチの中空の鉄球に乗り込んで、世界で初めて最大水深923メートルの深さにまで降りていった。厚い石英ガラスが嵌め込まれた小窓から外を覗き見ると、次々と目の前に現れる不思議な姿の発光生物たち。本書はその知的冒険の興奮を、ビービの才能あふれる筆致で伝えている。

05 Lithograph



《リトグラフ/「Piddock, Paper Pholas, Watering-Pot（ヒカリカモメガイ、ヨーロッパニオガイ、ジョウロガイ）」》
［J. G. Wood. The Illustrated Natural History Vol. 3. より］/
1863年、イギリス、17×15 cm（個人蔵）

二枚貝の仲間で発光する種はとても珍しい。その珍しい中のひとつが、イラストレーション左上のヒカリカモメガイ*Pholas dactylus*である。地中海周辺の浅い海に見られ、泥岩に穿孔している。この当時の人たちは、海の中の生き物の生態についての知識がない。だから、このイラストレーションに見られるように、当時の博物画における海洋生物はすべて陸に打ち上げられた姿で描かれた。



06 Lithograph

《リトグラフ/「Luminous Deep Sea Animals from the Mid-Atlantic（中部大西洋の深海発光動物）」》
［J. A. Thomson, The Outline of Scienceより］/
1922年・アメリカ／イギリス、20.8×26.8 cm（個人蔵）

このリトグラフが描かれた時は、まだビービによる有人深海探査は実施されていないから、実際に見た深海の様子を描いたわけではない。あくまでも想像の世界である。イラストは、左上からツマリヨコエソ属の一種、ヒカリイカの一種、ヒオドシエビの一種。ヒカリイカが捕えているのは、ハダカイワシの仲間だろうか。



07 Lithograph

《リトグラフ/「Tiefseefauna（深海の動物）」》
［マイヤー百科事典Meyers Konversations-Lexikonより］/
1890年代・ドイツ/24.5×30 cm（個人蔵）

ドイツの百科事典の挿絵から。中央の主役は、ワニトカゲギス科のトカゲハダカであろう。その右上でこちらを見つめる奇妙な魚は、眼下に赤く光る発光器を持つ同科のオオクチホシエソだと思われる。



08 Fossil

《三葉虫プリサイクロピゲ *Pricyclopyge longicephala*》
チェコ産化石／オルドビス紀（約4億5千万年前）（個人蔵）

古生代オルドビス紀に繁栄した三葉虫で、背中の中心あたりにある一対の丸くて小さい器官が発光器だと考えられている。もちろん光っているところを誰もみた人はいないが、三葉虫としては著しく巨大な複眼が、その可能性を示唆している。体長23 mm。



09 Shell Money

《貝貨》
上：パプアニューギニア・ニューアイルランド島／円周90 cm（個人蔵）
右：パプアニューギニア・本島西セピック州／円周122 cm（中部大学民族資料博物館蔵）

世界各地の貝貨（貝のお金）には、不思議と共通してタカラガイが使用されている（右）。しかも、基本的には、いずれも交易などにより共通の文化から広まったわけではなく、明らかにタカラガイを貝貨に使う文化が独立に世界で何度も起源しているのである。ところが、パプアニューギニア本島からそう遠くないニューアイルランド島のカビエンの貝貨は、意外にもタカラガイではなかった（上）。おそらくこれはキクザルガイの仲間で、殻が厚く貝ビーズ作成に向いていたのだろう。

貝のフォーク・アーツ

Field Note

海は支配されるべき場所ではない。とりわけ島に暮らす民族にとって、海は食料や日用品を作るための素材を調達する場所であり、近隣民族との文化交流の窓口でもあった。しかし西洋コロニアリズム（植民地主義）の波は船に乗ってやってきた。海辺に暮らす人々を真っ先に支配し、西洋の価値観や手法を強いた結果、彼らが育んできた多彩なフォーク・アーツ（民族芸術）は、徐々に姿を消しつつある。

ここでは、世界各地の民族が海からもたらされる生物素材を巧みに用い、さまざまな日用品や装飾品を作り出してきた様子を、当館収蔵の資料から紹介する。

主な素材は「貝」である。とくにタカラガイの仲間は、その美しさや輝き、ユニークな形状、珍しさに加え、加工や装飾に耐えうる殻の頑丈さから、世界各地でフォーク・アーツの素材として用いられてきた（白井, 1997）。

また、貝は貨幣としても使われた。世界各地に「貝貨（ばいか）」の文化があったことが記録されているが、そこでも多く使われたのはやはりタカラガイの仲間であった。私が訪れたパプアニューギニアのカビエンでは、現在もなお貝貨の文化が残っていた。ただし、そこで使われていた貝は意外にもタカラガイではなかった。なお、現在のパプアニューギニアの法定通貨単位である「キナ（Kina）」と「トヤ（Toea）」は、かつて貝貨に用いられていた貝の名に由来している（Soukup, 1997）。

参考文献
白井祥平（1997）『貝Ⅰ（ものと人間の文化史）』法政大学出版局
Soukup, M. (1997) Social life of currencies from Near Oceania: Types of currencies and its use. *Ann. Náprestek Mus*. 38, 17-30.





10 Mask

《祖霊の仮面》
パプアニューギニア／75×52 cm（中部大学民族資料博物館蔵）

タカラガイがあちこちに使われている。それにしてもタカラガイ類がこうも世界各地で時代を超えて珍重されているのは面白い。中東からは、約9000年前の遺跡からタカラガイが目にはめ込まれた頭蓋骨が出土している。確かに、形の面白さ、丈夫さ、艶など、タカラガイには装飾や貨幣に選ばれる要素がそろっている。



Chapter Ⅲ

陸の発光生物

ホタルは、日本に暮らす私たちにとって、郷愁を呼び覚ます重要な文化的シンボルのひとつとなっている。その歴史は平安時代まで遡り、現在にいたるまで文学作品や絵画、音楽などのなかにしばしば登場していることはご存知のとおり。また、ホタルは、絶滅危惧種ではないにもかかわらず、極めてインパクトのある「環境アイコン」のひとつとみなされ、全国で盛んに保全活動が行われている特別な昆虫でもある。ホタルの棲む川が一つあれば、そこには必ず地域独自の「ホタルを守る会」が存在する――そんな国は、まちがいなく日本だけである。

本章ではまず、このホタルに代表される陸上の発光生物たちを紹介する。実は、私たちに身近な陸上環境には、ホタル以外にもさまざまな発光生物が生息しているが、それらがホタルのように注目されることはほとんどない。

たとえば、「ホタルミミズ」。発光するミミズがいるとは初耳かもしれないが、なんとこれが日本のいたるところで見つけることができるほどありふれた生物なのである。現に、この民族資料博物館がある中部大学図書館の脇には、ホタルミミズを簡単に採集できる好スポットがある。しかし、足元にそんな不思議な生物が潜んでいようとは、学生たちのほぼ全員は何も知らずにそこを行き来しているのである。

カタツムリはどうだろう。雨の日のブロック塀などによく現れるカタツムリは、アジサイとともに梅雨の季節感を象徴するアイコン的存在だ。貝を背負ってゆるゆると動くユーモラスな姿と、指でつつくとツノ（後触角という）を出し入れする面白さから、日本では唱歌からキャラクターデザインに至るまで広く親しまれている。ところで、日本にはいないが、タイやシンガポールには「光るカタツムリ」が存在する。しかも、さほど珍しい種ではなく、現地の公園や庭などの比較的身近な場所にもいるのだが、それが注目されている様子はまったくない。そもそも、季節変化の乏しい熱帯地域では、たとえそれが発光しようとも、人々の生活と関わりのない「人畜無害な生物」に注意が向くことは少ないのかもしれない。

では改めて、なぜホタルだけがこれほど突出した文化アイテムとして日本で注目されてきたのだろうか。そして、どうしてその「ホタル文化」は、日本以外では発展しなかったのだろうか。ここではホタルに関する日本の文化資料をいくつか紹介しながら、日本人が育んできた独自の文化意識について考えてみたい。



11 Specimen

《標本/ホタル科、コメツキムシ科、ハエ目キノコバエのなかま》
（個人蔵）

発光性の昆虫は、甲虫目のホタル科とコメツキムシ科、ハエ目のキノコバエの仲間に知られている。ノハラボタルは、関東の大きな河川敷に見られる小さなホタルで、おそらく北米大陸から侵入してきたと考えられている。北米の*Photuris*属は、メス成虫が*Photinus*属など別な種のホタルのメスの発光パターンを真似た光り方をして、オスをおびき寄せて食べることで知られている。ホタルに似つかわしくない長い脚で俊敏に活動する。コメツキムシ科のうち発光するのはごく一部の種で、主に南米に分布している。背中の頭の近く（前胸）に一対の発光器がある。キノコバエの仲間では、ニュージーランドやオーストラリアの洞窟にすむヒカリキノコバエの仲間が有名。日本のニッポンヒラタキノコバエの幼虫も弱く発光する。下は日本固有種のゲンジボタル。

DETAIL / SELECTED SPECIMENS



12 Ukiyo-e Print

《木版画/当盛十花撰 牡丹》
制作：歌川豊国（三代目、歌川国貞）×歌川広重（初代）
出版：1858年（安政5年）
35.7×24.2 cm（個人蔵）

役者絵の名手・国貞と花鳥画の広重の合筆作「当盛十花撰」シリーズのひとつ。右は蛍籠を持った13代目市村羽左衛門（当時15歳）、左は団扇を持つ4代目市川小團次（当時47歳）。団扇には「引きつめて はなちそふなる かかしかな」の句がある。牡丹と浴衣と団扇と蛍籠――夏の風物を画面一杯にちりばめた人気アイドルのブロマイドといったところだろうか。



13 Ukiyo-e Print

《木版画 三枚続/闇のほたる》
制作：歌川豊国（三代目、歌川国貞）
出版：1842年（天保13年）　75×36 cm（個人蔵）

源氏物語を題材としたいわゆる源氏絵。ただし、服装は江戸時代風。蛍の浮世絵には珍しく舞台が室内であるため、画面の色合いが新鮮。うしろの紅葉をあしらった屏風を四代目豊国が描いている（「門人 一寿斎」の名がある）。目立たないが蛍は23匹も描かれている。右端でホタルにたかられているのが玉鬘。中央が、蛍に照らされた玉鬘の美貌に思わず扇子を落っことしている蛍兵部卿宮。一番左でしたり顔をしているのが光源氏ということになろう。







14 Photographic Panel

《写真パネル/「ワニを彫る男性」》
パプアニューギニア（1960年代後半［推定］＊撮影：畑中幸子）/
32.4×40.2 cm（中部大学民族資料博物館蔵）

パプアニューギニアの沼地や湿地にはニューギニアワニとイリエワニの2種が分布している。ワニはパプアニューギニアの人たちにとって昔から身近な食料源であり、家畜やまれに人を襲うこともある脅威の対象でもあった。そのため、パプアニューギニアには、ワニがフォーク・アーツのモチーフとなっているものが多い。とりわけ、ワニを霊的な力を持つ特別な存在と考えている地域もある。たとえばニューギニア本島のセピック川流域では、男性の成人儀式として身体に無数の傷を付けてワニの皮のようにする（通称クロコダイルマン）風習を持つ民族がいる。



世界の動物文化 Field Note

動物は、その場所の気候や地形や植物相からなる「環境」に適応して生きている。地質学的な時間スケールで環境が変化すると、動物は新たな適応地へと移動するか絶滅するが、運良く適応進化をとげた一部の集団はその場所で生き残る。

そこに人間が加わることで、両者の間に多様な相互関係が生じる。人々の暮らす場所に姿を見せる動物たちは、食糧となったり危害を加えたりすることで、人間の生活に直接関わってくる。たとえば、〈ワニ〉はその両方の面を持つため、ワニのいる地域のフォーク・アーツにはその姿が頻繁に登場する。

一方、人間の生活に及ぼす直接的影響は小さくとも、特徴的な姿や行動から神格化やシンボル化がなされ、フォーク・アーツの題材となる動物もある。たとえば、先に見てきた日本の〈ホタル〉、ここに紹介するインドネシアの〈カエル〉や中国のミャオの人々の〈チョウ〉などはその具体例である。

しかし、人間活動が環境に過度な負荷を与えた近代以降、環境変化の速度に適応が追いつかず、さまざまな動物の減少や絶滅を余儀なくされている。そして空いた生態学的地位には、今までいなかった動物や人間が持ち込んだ外来種が入り込んでくる。

フォーク・アーツに代表される動物文化は、コロニアリズムのような文化的外圧だけではなく、モチーフとなる動物自体が姿を消し、意味を喪失することでも崩壊していくのである。

15 Basket

《カエルの付いた籐編みのカゴ》
インドネシア/8×13.5×14.5 cm（中部大学民族資料博物館蔵）

かわいい！と思って見た人も多いだろう。インドネシアのどこのものかははっきりしないが、ロンボク島のものに似ている。ロンボク島や隣のバリ島では、カエルは豊作や雨をもたらす聖なる生き物として愛され、さまざまなフォーク・アーツのデザインにもなっている。農耕が盛んで雨季と乾季がはっきりした場所では、雨とともに鳴き始めるカエルはよく好まれる。日本でもカエルは好かれる傾向にあり、さまざまなキャラクターやグッズにカエルが使われ愛されている。





16 Kanzashi (Hairpin)

《チョウ柄のかんざし》
銀製／中国（民族：ミャオ、モン）/4.5×8.5 cm
（中部大学民族資料博物館蔵）

中国南西部の山岳地帯に暮らすミャオの人々には、カエデの木から生まれたチョウを自らの始祖とする創世神話がある。チョウが自分たちの祖先であるという伝承ゆえに、女性を飾る鮮やかな刺繍や銀飾りには、今もカエデとチョウのモチーフが多く見られる。チョウは世界各地の神話や伝承や装飾（例えば日本の家紋）にも登場するが、これほど根源的な象徴性を担う例はほかにはないだろう。

17 Choko (Sake Cup)

《猪口》
磁器/昭和初期（推定）/口径5 cm（個人蔵）

ホタルの発光器にあたる部分は生地が薄く作られ光が透けるようになっている。この手の磁器を「蛍焼」というが、ホタルがデザインされた蛍焼はこれ以外に見たことがない。反対側に赤い字で「南郷 宮宗」と書かれているのは、琵琶湖南端の瀬田川沿いにある南郷のこと。南郷は古くからホタルの名所として知られる。「河み舟」の文字があるので、当時は、季節になると地元の飲み屋がホタル鑑賞の小舟「蛍舟」を出していたのだろう。粗雑な造りは、蛍舟が庶民の気楽な楽しみだった当時の雰囲気を偲ばせる。



COLUMN
1

浮世絵に描かれたホタルたち

江戸から明治末あたりまで、町人の娯楽として大量に印刷され市中で販売された木版画は、一般に「浮世絵」と呼ばれている――正確には「浮世絵」の定義には肉筆画が含まれるので、ここでは肉筆画を含まない「錦絵」という用語が使われるべきであるが、あえて広く馴染みのあろう「浮世絵」という言葉を使う。

その浮世絵のなかには、ホタルが描かれているものが少なからずある。私はホタルの生物学を本業としているので、興味を持ってこれを眺めていると、当時ホタルという昆虫が日本でどのように認識されてきたのかが、だんだんと透けて見えてきた。それが面白くて、私はいつの間にかホタルの登場する浮世絵（これを私は「蛍絵」と呼んでいる）をコレクションするようになり、現在30点ほどを個人所有している。



（図1）勝川春扇《無題》1810年頃

私のコレクション以外に、世の中にはどんな「蛍絵」が存在するのか。試しに、国内外の美術館が提供するデジタルアーカイブ資料などを参照しながら調査をしてみた。すると、大衆娯楽としての浮世絵が衰退する明治後期までに限っても、約100点の作品が確認された。

まず、浮世絵創成期（江戸中期）の作には、単純に蛍狩りのようすを描いたものが多く見つかった。お金持ちの町人と思われる女子供たちが、うちわや扇で飛んでいるホタルを捕まえようとしている（図1）。蛍狩りが初夏のイベントとして大衆のあいだに定着していたことが伺える。

とくに、若い女性が1人や数人で描かれているものが多い点は注目に値する（P20参照）。美しく着飾った女性にフォーカスした図案が積極的に描かれたであろうことは当然予想されることであるが、それを割り引いたとしても、やはり若い女性だけで蛍狩りに出かける場面というのが実際にあったのだろう。当時の治安が比較的良かったことに加えて、民家に近い川や水田など身近な場所に現れる日本のホタル（ゲンジボタルとヘイケボタル）の生態が幸いして、ホタルを気軽に見に行ってその情を味わうという日本独自の文化が生まれたと考えられる。

蛍絵の題材としてもう一つ多いのが、実在した歌舞伎役者を並べた「役者絵」である。当時の浮世絵の役割のひとつに、人気役者のブロマイド的な機能があった。江戸後期になると、歌舞伎役者がみんなで蛍狩りをしている（架空の）ようすだったり、人気役者が浴衣姿でうちわとともにホタルが入った虫籠を持っている顔のアップだったりといった浮世絵が増えてくる（P14資料12を参照）。ホタルが、季節を表象する「アイコン」となっているのである。

さらに進んで、物語の一場面としてホタルが描かれることもある。例えば、『源氏物語』の第25帖「蛍」には、実際のホタルが登場する。主人公の光源氏が、暗い部屋の中にたくさんのホタルを放って玉鬘の美しさを照らし出すというイタズラをする場面が有名だ（余談ながら、現在の標準和名となっている「ゲンジボタル」は、源氏物語もしくはその主人公の光源氏に由来するとされる）。この平安時代作の『源氏物語』は、江戸時代になって多くの版本が刊行されたことで人気は庶民層にまで広がり、さらに戯作者・柳亭種彦によるパロディ版『修紫田舎源氏』が大ヒットしたことで歌舞伎の演目にもなったという。そのため、源氏物語を題材にした蛍絵は非常に多い（P14資料13を参照）。――ホタルに「物語性」が付与されている。

『枕草子』や上述の『源氏物語』にホタルが登場するように、平安時代にはホタル鑑賞は貴族階級の特権だったかもしれない。それが江戸時代になって社会が安定すると、庶民にも蛍狩りに出かけたり、文化芸術を楽しむ心の余裕が出てきた。文芸とホタルが交差し、単なる初夏の風物から物語性が付け加わっていったのである。

翻って思えば、現在の日本の私たちも驚くほどホタルに対して愛着を持っていることに気が付かされる。「ホタルの里」と呼ばれる場所は全国各地にあり、シーズンになると車が渋滞するほど遠方からも人が集まる。生物学的な知見も増えて（私もささやかながら貢献しているが）、生き物としてのホタルの理解は間違いなく深まった。

一方で、湯上がりに下駄履きでふらりと川を訪れたり、たまにホタルが部屋に入ってきたり、そんな環境に暮らしている人は今はほとんどいない。また、ホタルと聞いて『源氏物語』の場面を想起できる人が、今どれだけいるだろう。かつてのような文芸と生物が交差する豊穣なイマジネーションの世界は今のホタルからはほとんど失われ、単調な「かわいい」「きれい」で表現される珍しいムシに成り下がったように感じられてならない［O］。

Chapter IV

発光生物と持続可能な私たちの未来

エスノバイオロジーとは、単に生き物とヒトとの関わりについて「過去」を振り返り分析するだけのものではない。過去から現在につながる私たちの生き物の捉え方の変化と、そこに棲む生物相の移り変わりを見つめ直すことで、地域固有の生物と独自の文化がうまく共存できる持続可能な未来のあり方を模索する学問なのである（Society of Ethnobiology Website）。そこで最終章となる第４章では、未来に関わるエスノバイオロジーの可能性として、中部大学のヒメボタルの例を取り上げたい。

ヒメボタルは、「陸生ホタル」と呼ばれ、幼虫は川とは関係のない草むらで生活している。6月頃に現れる成虫は、ピカッピカッと強いフラッシュ光を放ちながら飛翔する（オスの場合）。一方、メスの成虫は後翅が完全に退化していて飛ぶことができない。近年の都市開発によりヒメボタルの小さな生息地は完全にパッチ状に分断されているため、ひとたびその場所が破壊されると、飛翔できないメスは生殖可能な場所に避難できず、その集団は絶滅してしまう運命にある。深夜に活動する集団が多く、「ホタルは川にいる」という先入観も手伝って、ヒメボタルが近くにいても誰も気付かず、いつの間にか土地開発により消えていく集団が少なくない。

中部大学のキャンパス内にもヒメボタルがいることを知る人は、学生はもちろん、長く勤める教職員の方々のなかでもごくわずかであろう。そうした状況の中、2016年、ヒメボタルの生息地である東門進入路の道路拡張工事が計画された。キャンパス内のヒメボタルの存在に気づいていた一部の教員はすぐさまこの計画に反応し、山下興亜学長（当時）とこの件で意見交換を実施した。その結果、当初の工事案の変更が認められ、ヒメボタルの生息に部分的に配慮した樹木の伐採と舗装整備が実施された（大場ら, 2016）。もちろん、大学側のこの賢明な判断にも、「ホタル」という力強い文化的アイコンの影響が少なからず作用していたことは間違いない。

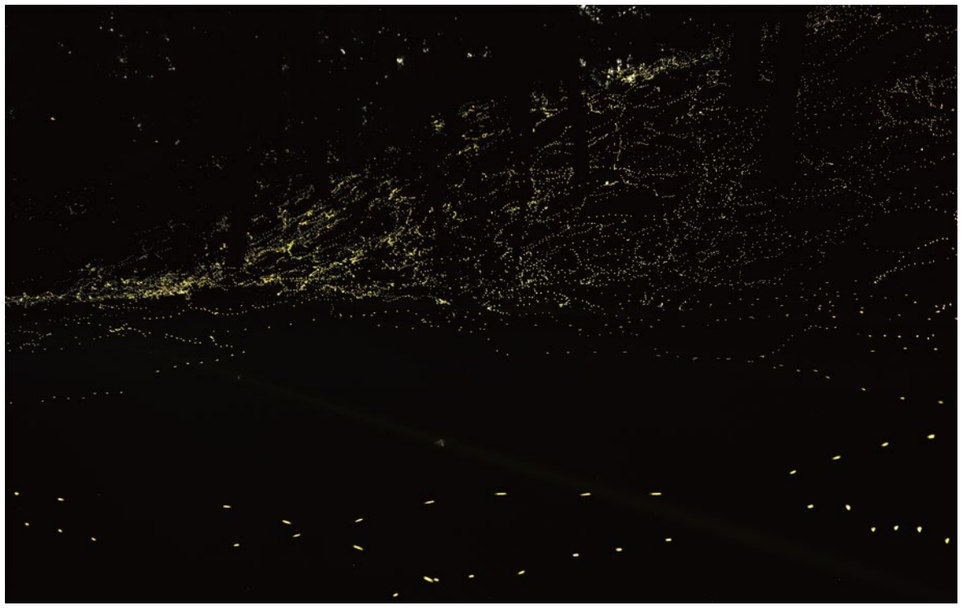
しかし、道路工事計画の変更を願い出た教員たちの真の意図は、単に一種の昆虫のみを守るということにあったわけではない。根底にあったのはあくまでも、「ヒメボタルも棲み続けられるような良好な生態系を、このキャンパス内で維持したい」という強い思いであった。

現在、そのときの働きかけのひとりだった小西哲郎教授（中部大学工学部）は、中部大の森にヒメボタルが現れる５月中旬から６月上旬にかけて、毎年その出現個体数の調査を行っている。こうした地道なモニタリング調査は、残された環境を未来に残すための重要な手掛かりとなるに違いない。そして、その調査情報をこうして公開することは、とても小さなことかもしれないが、大学に関わる多くの人たちが足元のキャンパスにある自然環境に改めて目を向けるひとつのきっかけとなるはずである。



参考文献
“What is Ethnobiology?”. Society of Ethnobiology Website. https://ethnobiology.org/about-ethnobiology/what-is-ethnobiology
大場裕一、小西哲郎、上野薫ら（2016）中部大学春日井キャンパス内のヒメボタルの記録．生物機能開発研究所紀要 17, 80-85.

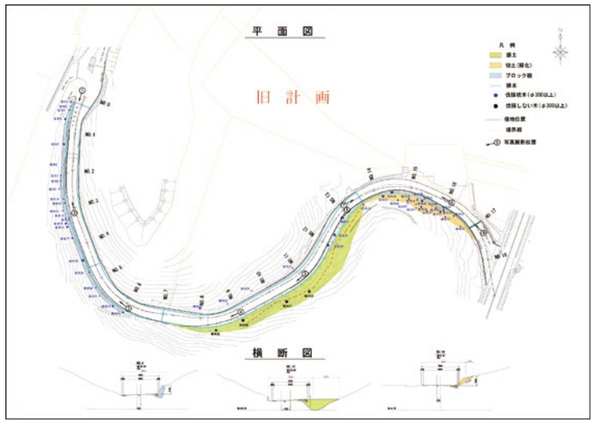
ここでは中部大学のヒメボタルと、その調査と保全に関する取り組みについて紹介する。なお、中部大学の森に広く分布しているヒメボタルは、なぜか北側と南側で異なる遺伝子タイプを持った集団に分かれていることが、我々の研究により確かめられている。

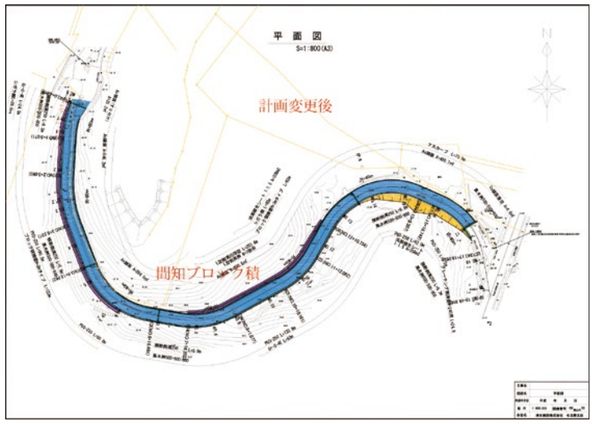


2026年5月26日深夜に中部大学東門進入路から斜面下に向かって撮影。道路を挟んでヒメボタルが低く飛び交っている。撮影者は小西哲郎教授。



内津川の反対側から中部大学の森を眺める。北（右側）と南で森の色が違うのがわかる。ひと続きの森は同じようでいて一様ではない。





東門進入路の工事計画。左は当初の計画の図面、右は計画を変更してヒメボタルが棲む森への影響を最小限にした新しい図面。資料提供：学校法人中部大学管財部施設課

COLUMN
2

パプアニューギニアと魂としてのホタル

2026年5月、パプアニューギニアの東端に位置するニューアイルランド島トメ地区にある小さな村を、2週間ほど訪れた。テレビ番組のロケに同行して『ホタルの木』を調査するためである。

ホタルの木とは、大群のホタルが一つの木に集まって同時明滅する現象で、世界的にもパプアニューギニアでしか報告がない。ホタルの同時明滅自体は東南アジアや北米の種でも知られているが、特定の一つの木に群れ集まるのがパプアニューギニアの「ホタルの木」の特徴である。そのようすは、まるで電飾をたくさんつけたクリスマスツリーのような奇観となる。

このホタルが見せる奇観の記録は、第二次世界大戦末期、ニューギニア戦線から極度の飢えと疲労を生き抜いた旧日本軍の手記の中にも見られる（たとえば、尾川, 1983；久保田, 1991）。極限状態にありながらもホタルの発光を記憶して語っているのは、ホタルを愛でる日本人特有の観念ゆえだろうか。あるいは、目にした現象があまりに奇妙だったからなのか。はたまた精神的な限界の中で、ホタルの光に霊的な幻影を見たのだろうか。

では、このような奇観を日常的に目にしている現地の人々は、ホタルに対してどういう思いや考えを抱いているのだろう。現地ガイドを通じてトメ村の村長に尋ねてみた。村長は、村人たちとしばらく話し合ったあと、思い出したようにこう語ってくれた。

「集団になったホタルの木が人の形に見えることがあって、そういうときは、そこに精霊が来ていると考える」

もっとも、しばらく話し合っていたことからも察せられたように、日常的に見るホタルに対しては、基本的に「なんとも思っていない」というのが実際のようだった。

一方、ニューアイルランド島よりもさらに東にあるニッサン島の出身の現地ガイドは、興味深い話を聞かせてくれた。ホタルの木については特別な言い伝えなどはないが、まれに村の中にホタルが1匹すーっと飛んでくると、最近亡くなった身近な人の魂が戻ってきたと考えるのだという。しかも、「死者の魂が飛んできたから怖い」という感情はなく、生まれ故郷の村を訪れてくれたことに感謝をしてお祈りをするのだそうだ。

この話を聞いて、赤羽礼子・石井宏『ホタル帰る』（2001年）を思い出した人もいるにちがいない。特攻隊基地のあった鹿児島県旧知覧町であった実話である。基地近くで食堂を営む鳥浜トメさんは特攻隊員たちに母親のように慕われていたが、そのひとり、当時20歳だった宮川三郎隊員はトメさんに「ホタルになって帰ってくるよ」と言い残して終戦間近の1945年6月、沖縄方面に飛び立ち消息を絶った。まさにその日の夜、1匹のホタルがトメさんの家の中に入ってきたという。

また、まさにパプアニューギニアでの話。この地の戦争で夫を亡くした遺族が慰霊祭に訪れたときのこと、夕闇が迫る祭壇の前で夫に語りかけていた妻の目の前に1匹のホタルが飛んできた。未亡人は「たしかにそうです、主人の魂です」と言ってホタルを手にとり、「お父さんありがとう」と言ってそっと空に放したという（尾川, 2000）。

先のコラムでも考察したように、日本では、ホタルを季節の美しい風物としてシンプルにとらえる場合が多い。しかし、たとえば芥川龍之介の訃報を知った時に詠まれた飯田蛇笏の代表句「たましひのたとへば秋のほたるかな」のように、ホタルの光が死者の霊と結びつけられることも時にある。だがそれは、何か特別な伝承や神話に結びつけなければならないような窮屈なものではなく、暗闇をほのかに光りながら人の近くを静かに飛ぶ様子から自然と呼び覚まされる、人間に共通するただ素朴なイマジネーションと捉えるべきだと、私は考える。日本から遠くはなれたパプアニューギニアで、現地のガイドが語ってくれたニッサン島の話が、そのことを証明しているように思う［O］。

尾川正二『極限のなかの人間―「死の島」ニューギニア』筑摩叢書（1983年）
尾川正二『戦争 虚構と真実－冷徹なる戦争論』光人社（2000年）
久保田義夫『さらばラバウル』武蔵野書房（1991年）
赤羽礼子・石井宏『ホタル帰る』草思社（2001年）



どこからか一匹のオスがスーッと飛んできてホタルの木の仲間に加わった

私たちは、もっと自然に学び、民族に学ばなくてはいけない

大場 裕一

本企画展をふりかえる

本企画展では、まず第１章で「発光生物とは何か」を紹介し、その多様性に触れていただいた。発光生物はホタルだけではないこと、そして実は、その多くが海に暮らす海洋生物であることを理解いただけたと思う。

続く第２章では、海洋生物学の進歩とともに、深海にはたくさんの発光生物がいることが明らかになっていく歴史を説明し、それが西洋のコロニアリズムと無関係ではなかったことを確かめた。急激に持ち込まれた西洋文化の影響は、各地に息づいていた豊かな民族芸術の世界を狭めることとなり、かつて「世界で最も石器時代に近い場所」（山口, 2014）といわれたパプアニューギニアの文化でさえもその侵食を完全に免れることはなかった。

もちろん、海洋生物学の進歩がもたらした明るい側面もある。地球表面の３割しかない陸域の、さらにごく薄い表面のみに暮らす私たち陸上生物はつい忘れがちだが、実は、地球の「生物圏」（生き物が棲むことのできる地球の全容積）の９割以上は「深海」が占めている。つまり、地球全体の生物環境を考える上で、深海は無視できない広大な領域なのだ。チャレンジャー号の世界一周航海から続く深海調査のおかげで、深海は生物のいない「死の世界」などではなく、無数の発光器を持つ奇妙な姿の魚類やイカや甲殻類がひしめく「発光生物の世界」であることが明らかとなり、この事実が人々の深海に対する知的好奇心を掻き立てたのである（西村, 1992）。今日でも博物館などで深海生物の展示があると、長蛇の列ができるほど爆発的な人気になることは周知のとおり。それならば、深海発光生物の研究が、地球環境に対する人々の関心の高めることに貢献している！――と言ったらさすがに身贔屓のし過ぎだろうか。

第3章では、ホタルを特別視する文化が日本独自のものであること、他方、別な国や民族ではそれぞれまた異なる動物が文化的に注目されている事実を、エスノバイオロジーの視点から確認した。なぜ日本ではホタルが大事にされるのか、その謎の答えを展示資料から多少とも明らかにできたものと考える。

第４章では、エスノバイオロジーと私たちの未来について考察した。エスノバイオロジーとは、単に生物をヒトとの関わりについての「過去」を振り返って分析するだけではない。私たちの現在の暮らしや文化に浸透している生き物との関わりを見つめ直すことで、地域固有の生物と独自の文化がうまく共存できるような、持続可能な未来のあり方を模索する学問であった（Society of Ethnobiology Website, 2026年7月閲覧）。

発光生物とパプアニューギニア

これまで私は、発光生物の調査で世界のいろいろなところを廻ってきた。しかし、2026年5月に訪れたパプアニューギニアほど衝撃的だった場所はない。

コラムにも書いたように、パプアニューギニアを訪れた表向きの目的は、ホタルがひとつの木に集まって同時明滅する「ホタルの木」を撮影するテレビ番組のロケに専門家として同行することであった。しかし、電気も水道もない小さな村に２週間毎日深夜まで通い、そこで彼らの日常生活を間近に見たことは、私にとってはある意味ホタルを観察すること以上の、かけがえのない体験だった。

電気も水道もない、と言ったが、実は驚いたことに村の若者たちはみなスマートフォンを持っていた。泣き止まない幼児にタブレット端末でアニメを見せていたのを目撃した時は、ほんとうにびっくりした。日本で我々がやってることと同じではないか！　どうやら電気はソーラーパネルで供給しているらしいが、不思議なことに、それ以外のことに電気を使っている様子はなかった（照明にもラジオにも湯沸かしにも使っていない）。それにしても、こんなジャングルのど真ん中でネットワークはちゃんとつながっているのだろうか。ともかく、若者はみなスマートフォンやタブレットを使っているのである。槍やスリングショットで野生動物を捕らえて、木を擦って火を起こして丸焼きにして食べているというのに！

「スマートフォンで最先端の情報を知ってしまうと、若者は村を出て都会に行ってしまうのではないか」と心配になった私は、このことを現地ガイドに聞いてみた。すると、ガイドは予想もしなかったことを教えてくれた。

「出て行く若者もいるが、結局みんな帰ってくるよ」

これを聞いて私は大きな思い違いをしていたことに初めて気が付いた。便利で快適なテクノロジーにあふれた都会生活の方が人は幸せに決まっている、という間違った思い込みである。電気がないから星明かり以外は真っ暗な中、村の人たちが夜遅くまで朗らかに談笑している様子を見ていると、彼らがこの生活を不便で楽しくないなどとは少しも思っていないことがわかる。彼らは、突然日本からやってきた我々にもとても親切で、これほど損得抜きで他人を思いやれる心にあふれている人たちに私は会ったことがない。私が中腰でホタルを観察し続けていると、村のひとりが無言ですっと木の椅子を差し出してくれた――そんなようなことが何度もあった。われわれが観察しているホタルの木、まわりが草だらけで歩きにくいと思ったのか、次の朝行ってみたらすっかり草が刈られていてたのはさすがに参った。ここだけ草が刈られていると不自然だから刈らなくていいですよと、これればかりは親切を断るしかなかった。

もちろん、NHKは村に取材料を支払っているはずである。私にはその額がどのくらいだったのかはわからないが、彼らの態度は、お金をもらったから親切にしているという計算が働いているようにはまったく見えなかった。そういえば、終戦間近パプアニューギニアに赴いた旧日本兵の戦記などを読むと、飢えや負傷で動けなくなったとき、彼らに与えるものが一切ない状況であったにも関わらず（むしろ、兵隊を助けることが危険であったにも関わらず）必ず現地の人に助けてくれた話が出てくるが（尾川, 1983; 久保田, 1991; 窪田, 1992）、それも大いにうなづけるというものである。有名な話で、戦時中ラバウルにいた漫画家水木しげるは、戦争が終わっても日本に帰るかここで村の人たちと一緒に暮らし続けるかを本気で迷ったという（水木, 1994）。われわれが村を離れる日、村長が「また来なさい、そのときまでにお前たちの家を建てておくからな」と言ったのは、決して冗談やリップサービスばかりではなかったであろう。

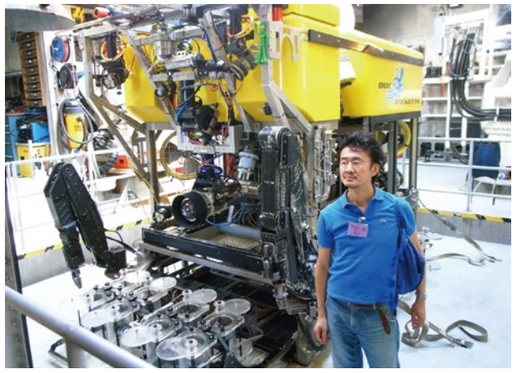
彼らは、「なんでわれわれがはるばる日本からやってきて２週間もずっとホタルなんてどうでもいい虫を撮影し続けているのか」最後まで全く理解できないようすであった。私も、村の人たちと長くいるうちに、何だかだんだんとホタルの研究なんかどうでもいいような気がしてきた。ここで「日々の生活のために生活」をするのも悪くないかも、などという思いが何度もよぎった。もっとも、猛烈な暑さで汗だくの不愉快さと恐ろしい蚊の攻撃に、すぐ正気にもどったのであるが。

伝統文化とコロニアリズム

たった２週間ではあったがパプアニューギニアの小さな村で暮らす中で、私が発光生物の研究をしていること、趣味でホタルが登場する浮世絵や陶磁器をコレクションしていたこと、深海発光生物の西洋博物画を集めていたこと、中部大学民族博物館の副館長を拝命されて行ってみたらパプアニューギニアの展示が充実していたこと、これらが一本の線でつながってきた。

伝統民族文化が西洋コロニアリズムにより破壊されつつある、という認識は正しいだろう。しかし、民族には外圧では揺るがないハードコア（信念の根源）の部分があって、それを取り巻く周辺の変更は受けてもハードコアはしばらくのあいだ持ちこたえる。そしてこれが、なかなかしぶとい。しかし、それがどうしても持ちこたえられなくなったとき、別なハードコアにガラリと置き換わるパラダイムシフト（この場合は、信念までも西洋化してしまうこと）が起こるのだ。

首都ポートモレスビーが現在どうかはわからないが、私が訪れたトメ村には、たとえ彼らがTシャツを着ていてもスマートフォンを使っていてもドローンを見て驚かなくても、ホタルの生物学に全く興味を示さなかったとしても、彼らのハードコアはしっかり保たれ



米モントレー湾水族館研究所の所有する深海無人探査船。2015年に行ったときのようす。



太田節次『蛍狩』。明治25年、浮世絵は木版画から石版画へと西洋化するが、ホタルは相変わらず日本の人々に愛されて続けている。



テレビ番組スタッフがドローン撮影をしている様子を興味深げに見に集まった村人たち。一番右にいる青年はタブレット端末で撮影をしている。



「ホタルの木」のホタル*Medeopteryx effulgens*



満天の星空の下、村の外れにある孤立した1本の木にホタルが群が叩同時明滅している。ニューアイルランド島にて。

ていた。なぜそれほどハードコアが強固なのか。その理由は、どうしてもそこに戻ってきたいくらい確かなヒューマニズムがあるからである。

持続可能な社会

また、彼らの生活の驚くべき点は、自然環境に対してほとんどまったく負荷を与えていないことである。排泄は村の中のどこかの秘密の場所で行われるらしいが(ホタルの幼虫を探していたときに、巨大な倒木の陰でちょっとニオう一角があったので、おそらくソコだと思うのだが)、わずか10から20人程度の村だから、すべては土に帰っていく。簡単な焼畑農業を行っていたが、とくに肥料は入れていないという。

「キャッサバなんて枝を土に突き刺しておけば勝手に育ちますから」

とは、日本で農業を学んだという現地ガイドの言葉。焼畑で切った木も、あっという間にまた伸びてくるから、森が失われるなんて心配はいらない。それ以外の野菜は、まさに野菜！その辺に生えているものを取ってきて食べている。皿はバナナの葉っぱ。食器も使うが、みな川で洗う。洗剤は使っていない。ブタを何頭か飼育していたが、野生のブタやイノシシと勝手に交配しているらしく、ほぼ放し飼いである。自然を破壊するどころか、木を切ったり火を焚いたりしなかったら、あっという間に村は自然に飲み込まれてしまうだろう。

村を去る最後の夜、私は親しくなった村の人たちに「このホタルの木をぜひ大事にしてください。きっとまた来ますから」と伝えた。いいことを言ったつもりだったが、日本に帰る飛行機の中で「なんで彼らにホタルを大事にして欲しいという必要があったのか」と自問しているうちに、答えがわからなくなった。

たとえ、彼らが何かの必要があってあのホタルの木を切ることになったとしても、ホタルたちは近くで適当な別な木を見つけてそこで命脈を保つだろう。開発により生息域が完全に分断され、これ以上自然を破壊したらその地域のホタルは確実に失われる今の日本とは違うのだ。

ひとつわかったこと。私たちは、もっと自然に学び、もっと民族に学ばなくてはいけない。

（おおばゆういち・中部大学応用生物学部 教授）

参考文献
尾川正二『極限のなかの人間―「死の島」ニューギニア』筑摩叢書（1983年）
窪田精『流人島にて』新日本出版社（1992年）
久保田義夫『さらばラバウル』武蔵野書房（1991年）
西村三郎『チャレンジャー号探検 近代海洋学の幕開け』中公新書（1992年）
水木しげる『水木しげるのラバウル戦記』筑摩書房（1994年）
山口由美『世界でいちばん石器時代に近い国パプアニューギニア』幻冬舎（2014年）
Society of Ethnobiology Website“What is Ethnobiology?”
https://ethnobiology.org/about-ethnobiology/what-is-ethnobiology

参考文献　日本語で読める発光生物に関する本

○渡瀬庄三郎『學藝叢談 螢の話』開成館（1902年）
○神田左京『光る生物』越山堂（1923年）
○神田左京『ホタル』日本發光生物研究會（1936年）
○原志免太郎『螢』実業之日本社（1940年）
○中村浩『冷光』弘文堂（1942年）
○挾間文一『發光動物』春秋社（1943年）
○南喜市郎『ホタルの研究』太田書店（1961年）
○原田一美『ホタルの歌』学研（1971年）
○羽根田弥太『発光生物の話 よみもの動物記』北隆館（1972年）
○後藤俊夫『生物発光』共立出版（1975年）
○羽根田弥太『発光生物』恒星社厚生閣（1980年）
○神田左京『復刻ホタル』サイエンティスト社（1981年）
○大場信義『ホタルのコミュニケーション』東海大学出版会（1986年）
○大場信義『日本の昆虫12 ゲンジボタル』文一総合出版（1988年）
○国松俊英『ゲンジボタルと生きる ホタルの研究に命を燃やした南喜市郎』くもん出版（1990年）
○遊磨正秀『ホタルの水、人の水』新評論（1993年）
○阿部勝巳『海蛍の光 地球生物学にむけて』筑摩書房（1994年）
○稲村修『ほたるいかのはなし』魚津水族館（1994年）
○三石暉弥『人里の可憐な昆虫 ヘイケボタル』ほおずき書籍（1996年）
○深石隆司『沖縄のホタル 陸生ホタルの飼育と観察』沖縄出版（1997年）
○矢島稔『ホタルが教えてくれたこと 私の昆虫記②』偕成社（2000年）
○遊磨正秀、生田和正『（現代日本生物誌２）ホタルとサケ』岩波書店（2000年）
○栗林慧『ホタル 光のひみつ』あかね書房（2002年）
○大場信義『ホタルの木』どうぶつ社（2003年）
○大場信義『ホタル点滅の不思議 地球の奇跡』横須賀市自然・人文博物館（2004年）
○東京ゲンジボタル研究所『ホタル百科』丸善株式会社（2004年）
○関口シュン『ホタルの光る川 いのちをまもるシリーズ６』佼成出版社（2005年）
○栗林慧（映像・写真）『光の芸術家 ホタル』アスク（2006年）
○阿部宣男『ホタル、こい！ ホタルの光を科学する』清水弘文堂書房（2006年）
○板当沢ホタル調査団［編］『日本産ホタル10種の生態研究』板当沢ホタル調査団（2006年）
○竹中豊『ウミホタルの歌』新風舎（2006年）
○さとうなおみ、さとうふみやす『ホタルの国から 沖縄・久米島のクメジマボタル』新日本出版社（2008年）
○大場信義『ホタルの不思議』どうぶつ社（2009年）
○下村脩『クラゲの光に魅せられて ノーベル化学賞の原点』朝日新聞社（2009年）
○近江谷克裕『発光生物のふしぎ』サイエンス・アイ新書（2009年）
○池田圭一、武位教子『光る生き物 ここまで進んだバイオイメージング技術』（2009年）
○石浦章一［監修］、生化学若い研究者の会［編著］『光るクラゲがノーベル賞をとった理由』日本評論社（2009年）
○三石暉弥『ホタルと暮らす ゲンジボタル その不思議な一生』信濃毎日新聞社（2010年）
○ヴィンセント・ピエリボン＋デヴィッド・F・グルーバー『光るクラゲ 蛍光タンパク質開発物語』青土社（2010年）
○梶田博司、青山勲『ホタルと人と文化』大学教育出版（2010年）
○古川義仁『ホタル学 里山が育むいのち』丸善出版（2011年）
○大場信義『こころも育つ 図解ホタルの飼い方と観察』ハート出版（2012年）
○西野嘉憲（写真）、大場裕一（解説）『光るキノコと夜の森』岩波書店（2013年）
○矢島稔（指導）『ほたる しぜん６』フレーベル館（2013年）
○大場裕一『ホタルの光は、なぞだらけ』くもん出版（2013年）
○中山れいこ『ホタル』少年写真新聞社（2013年）
○下村脩『光る生物の話』朝日新聞出版（2014年）
○宮武健仁『川のホタル 森のホタル』（月刊たくさんのふしぎ2015年６月号）福音館書店（2015年）
○大場裕一［監］『光る生き物 DVD付』学研プラス（2015年）
○大場裕一『光る生きものはなぜ光る？』文一総合出版（2015年）
○大場裕一『恐竜はホタルを見たか 発光生物が照らす進化の謎』岩波科学ライブラリー（2016年）
○山本勝博『ホタルイカ－不思議の海の妖精たち－』桂書房（2016年）
○サラ・ルイス（大場裕一監修）『ホタルの不思議な世界』エクスナレッジ（2018年）
○松本正勝『（化学の要点シリーズ35）生物の発光と化学発光』共立出版（2019年）
○近江谷克裕、三谷恭雄『生物発光の謎を解く』C&R研究所（2021年）
○近江谷克裕、小江克典『ふしぎ！光る生きもの大図鑑』国土社（2021年）
○大場裕一『光る生き物の科学』日本評論社（2021年）
○大場裕一『世界の発光生物』名古屋大学出版会（2022年）
○今津奈鶴子（大場裕一監修）『ほたるのひかりかた』（月刊かがくのとも2022年６月号）福音館書店（2022年）
○宮武健仁『光るきのこ』（月刊たくさんのふしぎ2023年６月号）福音館書店（2023年）
○大場裕一［編］『発光生物のはなし』朝倉書店（2024年）
○近江谷克裕、西原諒『生物発光が人類の未来を変える』C&R研究所（2024年）
○エイルサ・ワイルド『小さな共生者たち 光るイカのはなし』玉川大学出版部（2025年）
○遊磨正秀『じつは身近なホタルのはなし』緑書房（2025年）
○エディス・ウィダー『深海の闇の奥へ』紀伊国屋書店（2025年）
○コーリン・ペフ『ホタルのうた リンがみつけたエルクモントの光』化学同人（2026年）
○大場裕一『ホタルのことばが知りたい』くもん出版（2026年）

2026年度 中部大学民族資料博物館秋季企画展「発光生物とエスノバイオロジー」主要出品リスト

主催：中部大学民族資料博物館　会期：2026年10月30日（金）～ 12月25日（金）　会場：中部大学民族資料博物館

No.	資料名称	種別・材など	寸法（cm）	作者ほか成立情報	成立時期	所蔵	図録No.
1	祖霊の仮面／パプアニューギニア	木、タカラガイ、シュロ	52×75×15	東セピック州、マプリック	—	博物館	10
2	ワニを彫る男性	写真	32.4×40×2	撮影：畑中幸子 撮影地：東セピック州、ウェワック	撮影：1966年	博物館	14
3	深海発光生物（ギンハダカ他）	標本7種	——	採集：大場裕一 ギンハダカ採集地：高知県御畳瀬	—	個人蔵	01
4	貝貨と貨幣（通貨キナ、トヤ）／パプアニューギニア	貝貨2、貨幣2種	円周90、札12.6×7、コイン2.3（径）、円周132	貝貨（個人蔵）：ニューアイルランド島カピエン、同（館蔵）：西セピック州	（カピエン）：現代 （西セピック州）：1960年代	個人蔵・博物館	09
5	ベテルナッツ、タバコを入れる男性用の小物入れ／パプアニューギニア	クスクスの毛、貝、豚の牙	13×47×6	チンブー州、シナシナ地方	—	博物館	—
6	犬歯の首飾り／パプアニューギニア	歯	55×7	西部高地州、西セピック州、西セピック高地民	—	博物館	—
7	ALPHA HELIX RESEARCH PROGRAM :1969-1970 （アルファヘリックス号の調査報告書）	冊子	21.5×28	University of California, San Diego	1970年（アメリカ）	個人蔵	—
8	C. F. Holder, Living Lights, a Popular Account of Phosphorescent Animals and Vegetables	書籍	15×20	Published by Charles Scribner's Sons, NY.	1887年（アメリカ）	個人蔵	03
9	William Beebe, Half Mile Down	書籍	16.5×24	Harcourt, Brace and Co., NY.	1934年（アメリカ）	個人蔵	04
10	ALGAE SEA-WEEDS	銅版画	24.3×15.5	A History of the Vegetable Kingdom（挿絵）	1862年	個人蔵	—
11	Piddock, Paper Pholas, Watering-Pot （ヒカリカモメガイ、ヨーロッパニオガイ、ジョウロガイ）	銅版画	17×15	J. G. Wood. The Illustrated Natural History Vol. 3より	1863年（イギリス）	個人蔵	05
12	Tiefseefauna（深海の動物）	銅版画	24.5×30	マイヤー百科事典 （Meyers Konversations-Lexikon）より	1890年代（ドイツ）	個人蔵	07
13	Phosphorescent Animals	銅版画	14.5×24	イギリスのチェンバーズ百科事典の挿絵	1900-1920年代 （イギリス）	個人蔵	—
14	Luminous Deep Sea Animals from the Mid-Atlantic （中部大西洋の深海発光生物）	銅版画	20.8×26.8	The Outline of Science:A Plain Story Simply Told（1922）より	1922年 （アメリカ・イギリス）	個人蔵	06
15	A Deep-sea Scene	銅版画	21×26.8	The Outline of Science:A Plain Story Simply Told（1922）より	1922年 （アメリカ・イギリス）	個人蔵	—
16	Luminous Crustaceans	銅版画	15×22.4	Shelled Invertebrates of the Past and Present（1934）より	1934年（アメリカ）	個人蔵	—
17	Lysmaskar	銅版画	19×27	Krongen-Verlag（ドイツ博物画コレクション）のスウェーデン語版	1957年 （スウェーデン）	個人蔵	—
18	Mandnacht in den Tropen Mitschwärmenden Leuchtkäfern（Cucujos）（熱帯地方の月夜と群がるホタル）	銅版画	24×15.5	マイヤー百科事典より	1890年頃（ドイツ）	個人蔵	—
19	発光生物のクロモカード	石版印刷	38.3×46（額外寸）	多色刷り石版印刷（クロモリトグラフ）	1959年（ドイツ）	個人蔵	—
20	三葉虫プリサイクロピゲ *Pricyclopyge longicephala*	化石標本	9.3×6.5	採集地：チェコ	オルドビス紀 （約4億5千万年前）	個人蔵	08
21	発光カタツムリ	実物大フィギュア	高さ8（径7.5）	制作：河野甲	2025	個人蔵	—
22	ホタルミミズ（採集地・中部大学構内）	標本	6（高さ）	採集・制作：中部大学大場研究室	現代	個人蔵	—
23	ホタルミミズと関連図（採集地・中部大学構内）	写真・図	——	撮影：大場裕一 図の制作：大場裕一	現代	研究室提供	—
24	渡瀬庄三郎『學藝叢談 螢の話』	書籍	16×23（1冊）	開成館	出版：1903年（明治36年・初版は明治35年）	個人蔵	—
25	神田左京『ホタル』	書籍	17×24.5×3.5	日本発光生物研究会	出版：1935年 （昭和10年）	個人蔵	—
26	Lafcadio Hearn（ラフカディオ・ハーン/小泉八雲）『KOTTŌ』（初版本）	書籍	14×20.5	The Macmillan	出版：Company、1902年（アメリカ）	個人蔵	—
27	カエルの付いた籐編みのカゴ／インドネシア	植物繊維	8×13.5×14.5	—	—	博物館	15
28	トカゲの付いた小物入れ／フィリピン（民族：イフガオ）	植物繊維	12.5×8.3×8	—	—	博物館	—
29	チョウ柄のかんざし／中国（民族：ミャオ、モン）	銀	4.5×8.5	—	—	博物館	16
30	源氏雲浮世画合（げんじくもうきよえあわせ）	木版画	37.5×76.8 （3枚続き）	歌川国芳	出版：1845年頃	個人蔵	—
31	風俗三十二相 うれしさう	木版画	23.5×35	月岡芳年	出版：1888年 （明治21年）	個人蔵	—
32	猪口（古伊万里染付他）	磁器3種	5.5（口径）、8.5（口径）、5（口径）		元禄期、江戸後期、昭和初期（推定）	個人蔵	17
33	当盛十花撰 牡丹	木版画	35.7×24.2	歌川豊国 （三代目、歌川国貞）×歌川広重（初代）	出版：1858 （安政5年）	個人蔵	12
34	闇のほたる	木版画	75×36（3枚続き）	歌川豊国（三代目）（歌川国貞）	出版：1842年 （天保13年）	個人蔵	13
35	蛍をモチーフにした工芸品（竹細工・蛍籠・岐阜の水うちわ）	工芸3種	3.7×1.6、9.5×18、16.5×34.5	—	現代	個人蔵	—
36	染付皿（かまきりの図柄／蛍の図柄）	磁器2種	18.5（径）、五寸皿15.8（径）	—	（五寸皿）大正期	個人蔵	—
37	皿（蛍の装飾）	陶器	9.7（径）	—	江戸末期～明治	個人蔵	—
38	棗（蛍の図柄の螺鈿細工）	漆器	7×7.5	—	—	個人蔵	—
39	ホタル科、コメツキムシ科、ハエ目キノコバエのなかま	標本一式	51×42×6	制作：大場裕一	現代	個人蔵	11
40	シャーレ入り発光生物	標本2種	各9（径）	制作：大場裕一	現代	個人蔵	—
41	写真／ヒメボタル（採集地・中部大学構内）の写真と 関連図（中部大学東門の改修計画の地図／改修前と後）	写真、図	——	撮影：小西哲郎 図の提供：学校法人中部大学 管財部施設課	現代	個人蔵	P18

〈その他関連資料〉・映像資料：総監修：大場裕一『光る生き物』（DVD）制作：株式会社Gakken、2015年（個人蔵）
・調査用道具（図録番号02）、調査記録写真、関連書籍　　博物館：中部大学民族資料博物館

リストNo.3：図録掲載は一種のみ。No.4：図録掲載は貝貨のみ。No.32：図録掲載一種のみ。

謝辞

本展覧会の開催ならびに本図録の作成にあたり、
次の方々から多大な協力をいただきました。
記して深く謝意を表します。

＊順不同・敬称略

小西 哲郎

勢戸 研二

山下 崇

河野 甲

株式会社Gakken

株式会社ベネッセコーポレーション

学校法人中部大学 管財部

2026 中部大学民族資料博物館 秋季企画展

「発光生物とエスノバイオロジー」

2026年10月31日発行
発行　中部大学民族資料博物館
館長　中野 智章
住所：〒487－8501　愛知県春日井市松本町1200
電話：0568－51－9193　ファックス：0568－51－9194

印刷：株式会社ITP
デザイン：アシタノデザイン株式会社
撮影：タカギ ユウスケ
©中部大学民族資料博物館

[Exhibition]
2026 Chubu University Museum of Ethnological Art Fall Exhibition
"Luminous Organisms and Ethnobiology" Chubu University Museum of Ethnological Art, Kasugai-shi, Aichi-ken, Japan.

[Catalogue]
Edited by: Prof. NAKANO Tomoaki, Prof. OBA Yuichi, NAKAMURA Masao, HARADA Chikako, Chubu University Museum of Ethnological Art
Printed by: ITP Inc.
Designed by: Ashitano Design Inc.
Photo by: TAKAGI Yusuke
Published by: Chubu University Museum of Ethnological Art
Matsumoto-cho 1200, 487-8501 Kasugai-shi, Japan.
Tel +81-568-51-9193　E-mail: chubu-minzoku@fsc.chubu.ac.jp

©2026 Chubu University Museum of Ethnological Art, Japan.
All rights reserved.